

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 30 年 7 月 5 日現在

機関番号：13103

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26780435

研究課題名(和文) 教師の力量形成を促す「授業研究」の構造と学校文化の検討

研究課題名(英文) The school culture and process of effective Lesson Study for professional development

研究代表者

河野 麻沙美 (Kawano, Masami)

上越教育大学・大学院学校教育研究科・准教授

研究者番号：00539520

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、授業研究の国内外での評価を背景に、教師の力量形成を促す授業研究のあり方を検討することである。特に、授業研究の実施を支える学校文化に着目する。具体的には、授業研究の運営方法や構造、教師の研究活動の様相を明らかにするために、授業研究導入初期である国外の学校でアクションリサーチを行い、事例研究を行った(研究1)。また、国内において授業研究の実施を機会が多様でも定期的に行っている学校における授業研究の一連の活動と協働に着目して授業デザイン過程の談話分析を行った(研究2)。

研究成果の概要(英文)：This study focused on the school culture for effective Lesson Study. It has two studies.

One is a case study through the action research on Lesson Study implementation in an Indonesian private primary school. The main description was the process of introduction of new cultural activity Lesson Study. They gradually changed their understanding and recognition of Lesson Study itself.

The other is qualitative discourse analysis of Lesson Study discourse in Japan. Its research focus was How and what they talked about during Lesson Study, collaborative lesson design process. As the result, they have a discussion to have shared understanding of the purpose of their Lesson Study. The teacher who would have the research lesson had proposal by his own ideas, and the others submitted alternatives to promote the lesson elaboration. finally, they have shared responsibility for the design of the research design.

研究分野：教育方法学

キーワード：授業研究 学校文化 アクションリサーチ

## 1. 研究開始当初の背景

近年、学校現場において授業実践の改善や質的向上、教員研修の手法としての「授業研究 Lesson Study」について、国内外での再評価が進んでいる。国際的展開のきっかけは、Stigler & Hiebert(1999)が、国際学力調査において、日本の好成績・高学力に導く背景として教員研修システムの授業研究を紹介したことで知られるようになり、国内外の研究者による検討が進められてきた(Lewis, 2002)。また国内でも教員の力量形成、学校における教育力の向上という課題から、実践現場での再検討・再評価が進みつつある。また、授業研究を対象とした国際学会が毎年開催されるようになり、研究者だけでなく、実践者や学校経営、教師教育、教育行政の関係者といった参加者背景も多様性である。国際的な動向として実践現場での普及が見られる。

授業研究の積極的な導入や推進の一方、先に挙げた授業研究の国際学会では、実際の授業研究の成果報告とともに、授業研究実施に伴う困難や課題、混乱も報告されるようになってきた。また、日本国内で蓄積された様々な授業研究が、教師や学校を対象にしたワークショップやシンポジウムなどを通して紹介されている。それらは教育の質の向上に貢献しているが、その一方で授業研究の俯瞰的な情報の不足、断片的な方法に関する情報によって、既に国外においても授業研究の実施が目的化し、早々に形骸化と機能不全をもたらしている実態が指摘できる。

## 2. 研究の目的

本研究では、授業研究の国内外での評価を背景に、教師の力量形成を促す授業研究のあり方を検討する。特に、授業研究の実施を支える学校文化に着目する。具体的には、授業研究の運営方法や構造、教師の研究活動の様相を明らかにするために、授業研究導入初期である国外の学校でアクションリサーチを行い、授業研究を推進する研究文化の形成過程の事例研究を行う(研究1)。また、国内において授業研究の実施を機会も多様でも定常的に行っている学校における授業研究の一連の活動と協働に着目して検討を行う。特に授業研究の過程における「事前検討」と行われる協働的な授業デザイン過程の談話分析を行う(研究2)

## 3. 研究の方法

## (1) 研究1

インドネシアにおいて授業研究を導入した私立学校を対象に検討を行った。対象とする事例は、インドネシアで授業研究が導入された時期において、自発的に授業研究を実施し始めた点で特殊な事例といえる。インドネシアでの授業研究導入は、初期においては外部からの支援・主導による学校がほとんどである。対象とした私立学校はインドネシア教育大学(以下、UPI)と同じバンドン市に所在する

私立学校園の小学校である。30年あまりの歴史を持つ幼稚園と保育所を有する。当校の授業研究遂行に際しての協力関係の構築に基づいて活動に参画した。フィールドワーク、及びアクションリサーチの中で行ったインタビューや協議で得られた記録を筆録として残し、随時フィールドノートとしてまとめた。授業観察の記録、協議で使用した資料も含めて研究の活動記録として事例記述の資料とした。省察を求めて得られた情報から、研究テーマである授業研究に関する年表を作成し、インタビュー協力者の記憶と日誌等の記録に基づき、随時修正と加筆を行っている。

## (2) 研究2

A県B市立C小学校で、指導主事の訪問に伴う定期的な開催(2015年1月)であり、全学年において、協同による事前検討に決められた日程で行われた一連の授業研究協議会を対象とした。フィールドノーツを基に分析を行った。2回的事前検討会の4時間分(2.5+1.5時間)を本研究では、対象校と対象学年団の協力と了承のもと、筆者は授業研究の事前検討会と事後検討会談話に同席し、音声を記録している。合わせて、研究授業の参観を行った。それらの記録を元に、発話記録を作成し、本研究の基礎資料とし、談話内容と指導案の修正に向けた参加者の談話過程を記述し、Simon(1995)の指導サイクルの枠組みを視野にいれ、解釈的な分析を行う。

## 4. 研究成果

## (1) 研究1

対象校の授業研究の導入過程について、年次をおって授業研究の遂行方法とその際の葛藤の様相を、学校長等のスクールリーダーたちへのインタビューや問題解決に向けた協議で得られた情報を基に記述した。「授業研究」という好感的に捉えている日本から輸入した新たな手法への新鮮さと難しさを実践を通して認識していく導入期から、定期的な実施が安定し方法も定着していた時期に起きた「マイルストーン」と呼ばれる日本人研究者の来訪による質的転換期を経て、授業研究の方法そのものを改善し、本質的な授業改善を目指し、模索と混乱の時期を経ることで、授業研究という営為への再認識に至るプロセスを描き出した。また、授業研究を通して変化していく授業の様相や教師のリフレクション時の談話を基に、授業研究のもたらす教師の学習について事例を基に検討を行った。

次に、授業研究の導入と質的改善を支援したアクションリサーチのプロセスを記述した。最後に、アクションリサーチの省察と成果として、文化的実践としての授業研究を捉える視点を指摘し、今後の課題を示した。

## (2) 研究2

検討した事例について、質的な分析と解釈を中心とする。以下ではその概要を記述する。初回事前検討時には、具体的な指導活動の吟味に先立ち、本授業研究における研究課題としてのユニバーサルデザインに基づく授業の

あり方と小中学校連携事業としての授業研究のあり方について、共通理解を図る談話が進んだ。対象とする児童を想定しつつ、対象とする学力層が確認されると小中連携に向けて中学校側との連絡の際に、授業者が質問した内容、それに対する応答に関する一連のやりとりが紹介されている。

具体的な協議は、指導案の書き方から始まり、記述の重複や曖昧な表現への質問や簡潔な記述を求めるもの、その具体的な修正案が出されている。次第に、使用する教材や展開の代替案や教科書の展開を踏まえた協議へと移行していった。

授業者以外の教員が、授業者が取り上げた展開に加えて、教材の使用について、学習者にとって抽象度が高いことや認識の特徴を取り上げて、異論を複数だしている。合わせて、当該単元が、研究授業に適切とは言えないことなど、授業者が抱える困難を理解、共有しつつ、学習単元としての意味を問う談話へと移行していった。協議のために用意された時間を迎え、授業が次の事前検討にむけて修正すること、微細な文章の修正に関しては他の時間での支援を要請して、初回検討を終えた。2回目は、授業者が指導案の修正箇所から説明を始め、学習者の現状に関して授業や学習以外についても情報交換が行われている。研究授業が近づくことで想定される学習者の状況も詳しく述べられるようになり、個別の名前を上げながら、想定される反応や過去の様子などが語られていった。そうしたやり取りの中で、1回めの協議会では肯定的には捉えなかった授業者の用意した教材に対して、その使いやすさや学習者にとっての意味を理解する発言が出るようになってくる。一方で、授業者自身がその教材に対しての課題や困難を取り上げるなどして、教材の特性と単元を通しての学習展開や前後の具体的な指導のあり方が話されていった。課題選定や学習活動について詳細な検討はこうした議論と並行して行われ、協議の最後には協議で出た話題を基に留意すべき点をまとめ、最終稿にどのように反映されるかは授業者に委ねられて終えた。

事前検討会は、指導案を基盤として進められている。授業研究の課題や詳細な表現、フォーマットに合わせた記述のあり方はその場で理解が共有され、それに合わせて修正が方向づけられている。こうした指導案の詳細に関する協議は進行役の指示なしに授業の具体的な内容に入っていく。授業者に対して、その意図や想定を尋ねながら、他の参加者は自身の経験や解釈を加えて異論を唱えるものの、授業者の案に変更を要請するものではなかった。しかし、授業者は他の参加者の意見を聞きながら、指導案の修正を行っていく。2回めの検討では、他の参加者が授業者が用意していた教材の優位性を見出す代わりに、授業者がその課題を自ら述べるという展開を見せていく。

最終的には授業者に委ねて協議は集結するが、事後協議会で他校の参加者から質問が出されると授業者の応答に援護したり、協議を踏まえた意見を述べるなど、授業構成にはある一定の責任を共有しているように語る様子が見られた。

事前検討会における協同的な指導案作成を通して、各参加者の意見は、授業者が回収し、内的に再構成し、指導案の修正が行われているもので、具体的な反映は見えるものではない。しかし、こうした協同過程は研究授業の提案事項への責任と認識が共有されていく過程を捉えることができる。本研究の成果発表として行われた国際学会では、この様相を shared responsibility として、授業研究のあり方として重要な側面を事例に即して報告した。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1件)

河野麻沙美、「授業研究」の導入過程とその葛藤：インドネシアにおけるアクションリサーチからの検討、上越教育大学紀要、36(2)、2016年、pp73-84(査読なし)

[学会発表](計 3件)

Masami Kawano, Struggles and change through LESSON STUDY JOURNEY, Annual Conference of World Association of Lesson Study(WALS), November 2014, Indonesia University of Education

Masami Kawano, Case Study of collaborative planning of a math lesson in Japan: focusing on how they reach agreement of lesson plan, Annual Conference of World Association of Lesson Studies, November 2015,

Masami Kawano, LS East West East: what the UK discovered about school improvement and teacher learning in Lesson Study and how this is now informing Lesson Study research in Japan., Expert seminar in Annual Conference of World Association of Lesson Studies, September 2016, University of Exeter

河野麻沙美、授業研究における学習指導案検討の協同過程、日本教育工学会第32回大会SIGセッション(教師教育・実践研究)、2016年9月、大阪大学

[図書](計0件)

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織  
(1) 研究代表者  
河野 麻沙美 (Kawano, Masami)  
上越教育大学・大学院学校教育研究科・准教授

研究者番号： 00539520